

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	研究科の設置									
フリガナ設置者	カワサイイカダク 学校法人 関西医科大学									
フリガナ大学の名称	カワサイイカダク 関西医科大学大学院 (Graduate school of Kansai Medical University)									
大学の位置	大阪府枚方市新町二丁目5番1号									
大学の目的	関西医科大学の知的資源を広く社会に還元し、地域社会に開かれた大学を目指すとともに、医学知識の普及、生涯学習の促進を図ることを目的に、広く学習の機会を提供し、地域社会に対する教育、研究、診療の各分野において教育機関としての社会的使命を果たす。									
新設研究科等の目的	生涯健康科学研究科は、こどもから高齢者まで生涯にわたる健康科学についての学識を教授し、リハビリテーションのみならず、保健・医療・福祉分野に貢献する高度専門職業人及び研究者を育成することを目的とする。									
新設研究科等の概要	新設研究科等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部】 リハビリテーション学部理学療法学科、リハビリテーション学部作業療法学科
	生涯健康科学研究科 [Graduate school of Life Health Science] 生涯健康科学専攻 [Department of Life Health Science] 計	2年	8人	-	16人	修士 (生涯健康科学) [Master of Life Health Science]	保健衛生学関係 (リハビリテーション関係)	令和7年4月 第1年次	大阪府枚方市 宇山東町 18番89号	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	該当なし									
教育課程	新設研究科等の名称	開設する授業科目の総数					修了要件単位数			
	生涯健康科学研究科 生涯健康科学専攻	講義	演習	実験・実習	計	30 単位				
		14 科目	7 科目	0 科目	21 科目					
研究科等の名称			専任教員					助手	専任教員以外の教員 (助手を除く)	
			教授	准教授	講師	助教	計			
新設分	生涯健康科学研究科 生涯健康科学専攻		10 (10)	5 (5)	1 (1)	14 (14)	30 (30)	-	1 (1)	
	計		10 (10)	5 (5)	1 (1)	14 (14)	30 (30)	-	1 (1)	
既設分	医学研究科		75 (75)	64 (64)	137 (137)	126 (126)	402 (402)	-	-	
	看護学研究科		15 (15)	6 (6)	7 (7)	-	28 (28)	-	-	
	計		90 (90)	70 (70)	144 (144)	126 (126)	430 (430)	-	-	
合計			100 (100)	75 (75)	145 (145)	140 (140)	460 (460)	-	1 (1)	
職種			専属			その他		計		
事務職員			345 (345)			211 (211)		556 (556)		
技術職員			6 (6)			18 (18)		24 (24)		
図書館職員			7 (7)			5 (5)		12 (12)		
その他の職員			51 (51)			152 (152)		203 (203)		
指導補助者			-			-		-		
計			409 (409)			386 (386)		795 (795)		

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	・借用地 (看護学部) 借用地積: 1955.80㎡ 借用期間:50年			
	校 舎 敷 地	48,952.66㎡	— ㎡	— ㎡	48,952.66㎡				
	そ の 他	8,617㎡	— ㎡	— ㎡	8,617㎡				
	合 計	57,569.66㎡	— ㎡	— ㎡	57,569.66㎡				
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計				
		55,727.38㎡ (55,727.38㎡)	— ㎡ (— ㎡)	— ㎡ (— ㎡)	55,727.38㎡ (55,727.38㎡)				
講義室等・新設研究科等 の専任教員研究室		講義室	実験・実習室	演習室	新設研究科等の 専任教員研究室	講義室、実験・ 実習室、演習室 については大学 全体			
		20室	59室	74室	18室				
図 書 ・ 設 備	新設研究科等の名称	図書 〔うち外国書〕		学術雑誌 〔うち外国書〕		機械・器具 標本 点 点			
		冊	電子図書 〔うち外国書〕	種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕				
	生涯健康科学研究科	125,147 [45,220] (125,147 [45,220])	21,911 [15,619] (21,911 [15,619])	13,331 [10,796] (13,331 [10,796])	11,751 [10,135] (11,751 [10,135])	12,567 (12567)	112 (112)		
	計	125,147 [45,220] (125,147 [45,220])	21,911 [15,619] (21,911 [15,619])	13,331 [10,796] (13,331 [10,796])	11,751 [10,135] (11,751 [10,135])	12,567 (12567)	112 (112)		
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	
		教員1人当り研究費等		350千円	350千円	—千円	—千円	—千円	
		共同研究費等		2,000千円	2,000千円	—千円	—千円	—千円	
		図書購入費	1,373千円	—千円	—千円	—千円	—千円	—千円	
	設備購入費	—千円	—千円	—千円	—千円	—千円	—千円		
学生1人当り 納付金			第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次		
			600千円	400千円	—千円	—千円	—千円		
学生納付金以外の維持方法の概要			医療収入、補助金収入、寄付金収入等						
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 等 の 名 称 関西医科大学								
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	収容定員 充足率	開設 年度	所 在 地
		年	人	年次 人	人		倍		
	医学部医学科	6	127	—	752	学士(医学)	1.03	昭和 27年度	大阪府枚方市 新町二丁目5番1号
	看護学部看護学科	4	100	—	400	学士(看護学)	1.00	平成 30年度	大阪府枚方市 新町二丁目2番2号
	リハビリテーション学部 理学療法学科	4	60	—	240	学士(理学療法学)	0.99	令和 3年度	大阪府枚方市 宇山東町18番89号
	リハビリテーション学部 作業療法学科	4	40	—	160	学士(作業療法学)	0.84	令和 3年度	大阪府枚方市 宇山東町18番89号
	医学研究科 (修士課程)	2	8	—	16	修士(医科学)	0.56	令和 3年度	大阪府枚方市 新町二丁目5番1号
	医学研究科 (博士後期課程)	4	50	—	200	博士(医学)	0.80	昭和 36年度	大阪府枚方市 新町二丁目5番1号
	看護学研究科 (博士前期課程)	2	20	—	40	修士(看護学)	0.37	平成 30年度	大阪府枚方市 新町二丁目2番2号
看護学研究科 (博士後期課程)	3	5	—	15	博士(看護学)	1.60	平成 30年度	大阪府枚方市 新町二丁目2番2号	
附 属 施 設 の 概 要	名称 関西医科大学附属病院 目的 臨床教育・臨床研究・医師の育成 所在地 大阪府枚方市新町二丁目3番1号 設置年月 平成18年1月1日 規模等 土地 35,667㎡ 建物延面積 71,871㎡ 病床数 751床				名称 関西医科大学総合医療センター 目的 臨床教育・臨床研究・医師の育成 所在地 大阪府守口市文園町10番15号 設置年月 昭和7年4月9日 規模等 土地27,333㎡ 建物延面積47,083㎡ 病床数 477床				
	名称 関西医科大学香里病院 目的 臨床教育・臨床研究・医師の育成 所在地 大阪府寝屋川市香里本通町8番45号 設置年月 平成22年7月1日 規模等 土地 4,599㎡ 建物延面積 15,343㎡ 病床数 199床				名称 関西医科大学くずは病院 目的 臨床教育・臨床研究・医師の育成 所在地 大阪府枚方市楠葉花園町4番1号 設置年月 平成30年1月1日 規模等 3,312㎡ 建物延面積 8,678㎡ 病床数 94床				
	名称 附属生命医学研究所 目的 臨床教育・臨床研究・医師の育成 所在地 大阪府枚方市新町二丁目5番1号 設置年月 平成18年8月1日 規模等 建物延面積 4,651㎡				名称 附属光免疫医学研究所 目的 臨床教育・臨床研究・医師の育成 所在地 大阪府枚方市新町二丁目5番1号 設置年月 令和4年4月1日 規模等 建物延面積 1,508㎡				

(注)

- 1 共同教育課程の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設研究科等の目的」、「新設研究科等の概要」、「教育課程」及び「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「既設分」については、共同教育課程に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学院の研究科の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「講義室等・新設研究科等の専任教員研究室」、及び「図書・設備」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「講義室等・新設研究科等の専任教員研究室」、「図書・設備」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要																			
(生涯健康科学研究科 生涯健康科学専攻 修士課程)																			
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		専任(助手を除く) 教員以外の教員			
専門基礎科目	生涯健康科学特論	1前	/	2			○			3						オムニバス			
	グローバルヘルスト論	1前	/	1			○			2	1					オムニバス			
	研究方法特論Ⅰ	1前	/	1			○			1									
	研究方法特論Ⅱ	1後	/	1			○			1	2					オムニバス			
	データアナリティクス特論	1前	/	2			○			1	1		2	1		オムニバス・一部共同			
	リサーチ・プレゼンテーション &アカデミック・ライティング	1後	/	1			○			1									
	地域包括ケア特論	1後	/	1			○			1	1		1			オムニバス			
	リハビリテーション教育学特論	1後	/	1			○			2	1					オムニバス			
	心理学特論	1後	/	2			○			1	2		5			オムニバス・一部共同			
	基礎解剖生理学	1前	/	1			○			1	1					オムニバス			
	生涯発達学特論	1後	/	2			○			3	1		1			オムニバス・一部共同			
	高度医療技術演習Ⅰ	1後	/	2				○		1	2		7			オムニバス・一部共同			
	高度医療技術演習Ⅱ	1後	/	2				○		2	1	1	4			オムニバス・一部共同			
小計(13科目)	-	-	-	8	11	0	-	-	-	10	5	1	14	0	1	-			
専門科目	生体機能解析学特論	1前	/	2			○			4	1					オムニバス			
	健康支援開発学特論	1前	/	2			○			2	2					オムニバス			
	こどもとおとなの神経科学特論	1前	/	2			○			2	1					オムニバス・一部共同			
	こどもとおとなの生活科学特論	1前	/	2			○			2	1	1				オムニバス			
	生体機能解析学演習	2前	/	2				○		4	1					オムニバス			
	健康支援開発学演習	2前	/	2				○		2	2					オムニバス			
	こどもとおとなの神経科学演習	2前	/	2				○		2	1					オムニバス			
	こどもとおとなの生活科学演習	2前	/	2				○		2	1	1				オムニバス			
小計(8科目)	-	-	-	16			-	-	-	10	5	1	0	0	0	-			
科研究	特別研究	1~2通	/	10				○		10	5	1				-			
	小計(1科目)	-	-	10				-	-	10	5	1				-			
合計(22科目)				-	-	-	18	27	0	-	-	-	10	5	1	14	0	1	-
学位又は称号		修士(生涯健康科学)			学位又は学科の分野				保健衛生学関係(リハビリテーション関係)										
卒業・修了要件及び履修方法								授業期間等											
専門基礎科目から14単位以上、専門科目から6単位以上、専門科目については演習科目と同一の領域の特論科目を履修した上で、別の領域の特論科目を履修し、特別研究10単位を取得し、合計30単位以上を取得すること。修士論文を提出し、審査を受け、最終試験に合格すること。								1学年の学期区分		2期									
								1学期の授業期間		15週									
								1時限の授業の標準時間		90分									

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行うとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科(学位の種類及び分野の変更等に関する基準(平成十五年文部科学省告示第三十九号)別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。)についても作成すること。
- 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校等の取容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「主要授業科目」の欄は、授業科目が主要授業科目に該当する場合、欄に「○」を記入すること。なお、高等専門学校等の学科を設置する場合は、「主要授業科目」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 「単位数」の欄は、各授業科目について、「必修」、「選択」、「自由」のうち、該当する履修区分に単位数を記入すること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 「基幹教員等の配置」欄の「基幹教員等」は、大学院の研究科又は研究科の専攻の場合は、「専任教員等」と読み替えること。
- 「基幹教員等の配置」欄の「基幹教員以外の教員(助手を除く)」は、大学院の研究科又は研究科の専攻の場合は、「専任教員以外の教員(助手を除く)」と読み替えること。
- 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
 - 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「基幹教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「基幹教員等の配置」を併記すること。
 - 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
 - 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。
- 高等専門学校等の学科を設置する場合は、高等専門学校設置基準第17条第4項の規定により計算することのできる授業科目については、備考欄に「☆」を記入すること。

授 業 科 目 の 概 要				
(大学院生涯健康科学研究科生涯健康科学専攻)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門基礎科目	生涯健康科学特論		<p>(概要)</p> <p>急速に進む少子高齢化等の社会情勢の変化に伴い、保健・医療・福祉分野において、人々の心身の健康に対して多角的な視点から科学的にアプローチする必要性が高まっている。本科目では、人間のこころとからだの健康に関する基礎知識についての理解を深め、こどもから高齢者に至る生涯を通じた予防・健康づくりに関する理論や方法論について幅広く学び、生涯健康科学の学問領域を俯瞰する。また、生涯健康科学を多面的に追究し、科学的根拠に基づく健康科学の実践の基盤となる能力を身につけることを目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(2 種村 留美／4回)</p> <p>リハビリテーションは、対象者理解はICF（国際生活機能分類）で捉えることが基本であり、リハビリテーションの領域は、医学的リハビリテーション、教育的リハビリテーション、職業的リハビリテーション、社会的リハビリテーションなどがある。リハビリテーションは疾病の治療のみならず、対象者の個々の環境によって職業復帰や社会復帰、教育の環境設置などが必要となる。講義の中ではこれらのリハビリテーションの基礎を捉え、こどもからおとなまでのヘルスプロモーションについて教授する。</p> <p>(7 池添 冬芽／8回)</p> <p>ヒトの心身の健康について、学術的・多面的な視点から理解を深めるとともに、特に高齢者の健康寿命延伸に向けた支援に焦点を当て、科学的根拠に基づく高齢者の身体機能低下予防・健康増進対策の基礎理論や評価・介入の具体的手法、多職種連携とマネジメントの重要性について学修する。</p> <p>(8 吉村 匡史／3回)</p> <p>成長、加齢に伴って人間の心理や認知機能には変化が生じる。また、こどもからおとなまで、年代ごとに心理面における特徴が存在する。これらの変化や特徴を理解することは、心身の健康を生涯にわたって維持するために重要な事項である。本講義では、年代ごとの心理・認知機能における特徴と望ましい介入について概説する。</p>	オムニバス
専門基礎科目	グローバルヘルス特論		<p>(概要)</p> <p>生涯健康科学では、こどもから高齢者までの生涯に亘った健康問題を課題とするが、さらにグローバルな課題についても本科目では追求する。具体的には本邦と世界各国の健康問題や健康格差などについて文献的な調査研究（海外での医療・保健・福祉・教育体験およびボランティア体験等を含む）、プレゼンテーションとディスカッションを行い問題解決能力を高める。ライフステージに合わせた健康づくりに関しては世界共通の課題であり、社会保障や保健医療、介護・福祉サービスなどのグローバルな課題に焦点を充て、将来的なグローバルヘルスリーダー育成を目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全8回)</p> <p>(2 種村 留美／2回) 本邦と先進国及び後進国では、社会保障政策に違いがある。各国の生活、医療、教育等の事情を把握したうえで、社会保障政策を調査し、国際協力プロジェクトの具体的な立案など対応策をグループで検討し、アクティブラーニングで発表をする。</p> <p>(4 福井 信佳／2回)</p> <p>日本政府が行っている国際協力について講義する。具体的には、JICA (Japan International Cooperation Agency) が行う有償・無償資金協力及び技術協力を紹介する。その上で開発途上国が抱える課題解決の取り組みについて講義し討論する。また自身の国際協力の体験を通して、教育・研究との関連について講義する。</p> <p>(11 浅井 剛／4回)</p> <p>世界的な高齢化の進行に伴う疾病構造の変化について概説する。また、海外において介護分野におけるNGO活動と直面している課題を提示し、これら諸問題に対して日本人専門家がどのような役割を果たしているかについて、具体的な事例を通じて紹介する。</p>	オムニバス

専門基礎科目		研究方法特論Ⅰ	<p>(10 野村 卓生／8回)</p> <p>研究活動は、社会からの信頼と負託の上に成り立っているため誠実に実施する必要がある。その認識のもとに、研究者自身は積極的に研究倫理を遵守し、所属機関は研究者が誠実な研究活動を実施できるよう研究環境を管理し、研究者への教育に対する取り組みを行っている。しかしながら研究結果の捏造や改ざん、不適切なオーサiershipといった研究不正は後を絶たない。こうした課題の解消には、研究者自らが研究倫理への理解を深めることは当然であるが、研究機関が責任をもって教育に取り組むことが重要である。この科目では大学院生が責任ある研究活動を行うための規範を涵養することを目指す。</p>	
専門基礎科目		研究方法特論Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>人々の生涯にわたる健康づくりとその維持に貢献するためには、保健・医療・福祉の分野に関する知識を身につけるだけでなく、自ら積極的に疑問を持ち探求する姿勢とその実践が必須である。本科目では、研究を実践するにあたって必要な事項、すなわち研究疑問の設定、研究の立案・実施、結果の解釈における注意点などを学ぶとともに、生涯健康科学領域での研究の最先端を知ることで、保健・医療・福祉の分野に携わる人材に必要な研究スキルを身につけることを目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全8回)</p> <p>(2 種村 留美／2回)</p> <p>研究手法として、量的研究と質的研究があり、行動観察など対象者の状況を捉えるのに量的研究では困難な場合がある。質的研究には現象学やグラウンデッドセオリー、伝記研究、事例研究などの歴史と具体的な研究手法を教授する。さらに、質的研究のみでは研究のグレードとしては弱い場合の、質的研究と量的研究のエビデンス統合についても教授する。</p> <p>(11 浅井 剛／4回)</p> <p>研究を開始する際に必要となる疫学的基礎知識（課題設定、研究デザイン）に関して、様々なPECOの実例を取り上げ、説明する。また、研究における環境構築についてハード・ソフトの両面から説明し、それぞれの研究環境で取り組むべき課題について議論する。</p> <p>(14 福元 喜啓／2回)</p> <p>主要な2つの研究デザインである、観察研究と介入研究の進め方について学修する。具体的には、仮説要因の強さや大きさ、検査・評価や介入方法の有効性を検証するにあたっての観察または介入研究の基礎を理解するとともに、研究の計画立案・実施から解釈までの一連の流れについて学修する。</p>	オムニバス

<p>専門基礎科目</p>		<p>地域包括ケア特論</p>	<p>(概要) 高齢者や障がい者およびその家族が住み慣れた地域において自分らしい生活ができるよう、医療・介護・生活支援を包括的に提供するためには、様々な組織・機関や専門職種がそれぞれの役割を理解し、協働しながら多面的な視点で支援策を展開しなければならない。本科目では地域包括ケアシステムを推進する上で基盤となる知識や介入手法、関連制度、各専門職・機関の役割、専門職に求められる視点と専門職連携について学修する。 (オムニバス形式／全8回)</p> <p>(7 池添 冬芽／5回) 地域において医療・介護・生活支援を包括的に提供する上で必要な基礎知識や介入法について学修する。具体的には地域包括ケアシステムの概要、関連法規、各専門職種・サービス提供機関の役割と連携、高齢者の心身機能低下予防のための基礎理論や介入法、地域包括ケアシステムにおける実践的取り組み（予防的介入、フィールド調査等）について理解を深める。</p> <p>(12 三木 恵美／1回) 地域包括ケアシステムの実現に向けて、住民は自助・互助を高めること、自治体は「だれもが住みよい街づくり」を推進することが求められている。住民の自助・互助の向上及びだれもが住みよい街づくりに向けたリハ職の取り組みについて概説し、リハ職に求められる役割と新たな取り組みの可能性について考察する。</p> <p>(21 脇田 正徳／1回) 要介護状態となりやすい原因として、認知症、脳血管障害、フレイル/サルコペニア、転倒などがあり、介護予防ではこれらに対する効果的な介入が求められる。本講義では直接的および間接的な関わり方を含めて実践的アプローチを学び、現状の課題を解決するための手法についても理解を深める。</p>	<p>オムニバス</p>
<p>専門基礎科目</p>		<p>リハビリテーション教育学特論</p>	<p>(概要) 本講義では、リハビリテーションの卒前教育や新人療法士の卒業後教育、そしてこれらを指導するための指導者養成教育を担う者に求められる豊かな人間性と倫理観を身につけるために必要な教育学および教育実践について学修する。また、現場を管理するために必要となるマネジメント能力についても学修する。具体的には、教員・指導者・管理者に求められる資質・能力と職業倫理、教育方法の基礎となる理論や技能、コミュニケーションスキル、職場の教育システムなど、指導的立場に立つ人となるために必要な知識と技能を学修する。 (オムニバス方式／全8回)</p> <p>(4 福井 信佳／2回) 教員（特に医療系教育機関）が自らの社会的役割や責任を果たすために必要となる職業倫理について講義する。暴言・暴力などのハラスメントを予防し学内教育をどのように進めるべきかについて考察する。また学生の学習到達度であるルーブリックの活用法及びポートフォリオについて講義する。さらに教員に対するポートフォリオ作成についても解説する。</p> <p>(5 加藤 寿宏／4回) 教育機関における教員、臨床実習指導者、現場の管理者に求められる資質や能力について講義する。また、管理者としてのリーダーシップとマネジメント能力、職場の教育システム、人事労務・業務管理についてアクティブラーニングを用いて学生の主体性に基づき講義、議論を行う。</p> <p>(12 三木 恵美／2回) 教育機関や医療現場における教育指導法について、コーチングやティーチングを用いた指導方法やPBL（問題解決型学習）、OSCE（Objective Structured Clinical Examination）による教育評価、クリニカルラーニングについて、講義、演習を行う。</p>	<p>オムニバス</p>

<p>専門基礎科目</p>	<p>心理学特論</p>	<p>(概要) 心理学は医療、保健、福祉、教育、産業など社会のさまざまな場面に牽連する、非常に重要な学問であることから、生涯健康科学を学ぶにあたっても習得することが必須の領域である。本特論では心理学の基礎となる事項（生理心理学、発達心理学、神経心理学、行動心理学など）、そして特に臨床で必要とされる心理学の基本的な理論と知識、すなわち面接や心理検査による心理学的評価、面接において必要な技法、種々の心理商法の技法と適応範囲を紹介する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(8 吉村 匡史／8回) 発達心理学、生理心理学、神経心理学、認知心理学など基礎心理学の概要を説明し、応用心理学の一つである臨床心理学の概要および臨床における心理学的評価法（面接法、心理検査など）と治療法、年代別の留意点について概説する。さらに、心理学と生涯にわたる心身の健康維持との関連についても説明する。</p> <p>(12 三木 恵美／1回) 悪性疾患（悪性腫瘍）患者が抱える精神的問題や苦痛について概説し、リハビリテーションにおける評価およびアプローチ、支援について講義、演習を行う。加えて、悪性疾患患者に関わる医療専門職として身につけるべきコミュニケーションスキルについて講義、演習を行う。</p> <p>(15 松島（杉本）佳苗／1回) 主に乳幼児・児童期にみられる心理的特徴について講義を行う。また、発達検査の概要やその理論背景に関する基礎的知識を学ぶことにより、発達の観点からも理解を深める。</p> <p>(19 橋本 晋吾／1回) 日常生活動作に影響する高次脳機能に対する神経心理学的検査および観察評価の方法や技術について学ぶ。本講義では特に、注意機能、前頭葉機能、遂行機能、記憶機能にフォーカスし、それらが我々の日常生活動作にどのように関係しているのか、障害を有した対象者に特徴的な日常生活動作の特徴や問題点、支援するために必要な知識についての理解を深める。</p> <p>(23 砂川 耕作／1回) 現代社会はICTの発展により電子機器の使用が必要不可欠であり、視覚や視空間認知などの認知機能の低下によりこれらの機器に対応できず、社会的参加が制限されることがある。本授業では、現代社会で生じる日常生活の障害について、神経心理学的検査や観察評価との関連や介入方法を解説する。</p> <p>(24 山下 円香／1回) 脳内ネットワーク機能と心理状態についての関係を概説し、脳器質性疾患による脳内ネットワーク異常がもたらす心理的特性の変化や特徴について理解する。</p> <p>(26 林 良太／1回) 臨床心理学と認知心理学の理論的枠組みと実践を説明するとともに、心理学と精神疾患との関連について教授する。また、精神科領域における臨床心理学と認知心理学の活用と臨床実践についても教授する。一部、臨床心理学的評価法および治療法を演習として体験し、討議する。</p> <p>(8 吉村 匡史、17 宮原 智子／1回) 高次脳機能障害においては、精神心理面の障害も多大に併せ持つことが多い。脳血管障害後の高次脳機能障害のうつ症状や病識の問題、頭部外傷後の易怒性やApathyなどの社会行動障害などを教授し、そのリハビリテーションについても概説する。</p>	<p>オムニバス 一部共同</p>
---------------	--------------	--	-----------------------

専門基礎科目	基盤解剖生理学	<p>(概要)</p> <p>本科目では、人体の構造と機能を理解するための解剖学と生理学に関する基礎知識を包括的に学ぶ。人体をその働きから捉え、器官系を有機的に結びつけた構成とすることによって、修士課程の学生に必要な解剖学・生理学の基礎的知識を網羅する。解剖学では、四肢や顔面口腔領域における筋、骨の構造を、生理学では、神経の基本的構造とその機能（神経興奮伝導と筋収縮等）、感覚器（体性感覚、特殊感覚、疼痛等）、循環器系を主に取り上げる。講義では、疾患、障がいの理解につながる解剖・生理学の知識にも触れ、健康に関する情報を読み解く基盤となる解剖・生理学の知識の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全8回)</p> <p>(1 飯田 寛和／2回)</p> <p>人々の健康支援を考える上で、運動器一般を理解することは重要な事である。そのため運動器及び運動器の形態・構造等についての基礎的な理解を深め、健康の回復、保持及び増進に必要な支援について理解する。</p> <p>(13 前澤 仁志／6回)</p> <p>解剖学では、人体の基本構造を学んだ上で、特に顎口腔領域の骨、靭帯、筋肉について解説し、顎口腔機能（咀嚼、嚥下、発話等）について理解する。生理学では、神経組織の基本構造と機能、中枢神経と末梢神経、感覚器、循環器を取り上げ、人体の構造と機能を理解するための解剖学と生理学に関する基礎知識を包括的に学ぶ。</p>	オムニバス
	データアナリティクス特論	<p>(概要)</p> <p>本授業では、ヒトから得られる生体情報の中でも非侵襲的生理情報に注目し、それらの計測方法を学ぶとともに、情報を解析し、結果を解釈するための一連の過程を教授する。得られる情報の性質、ならびに情報を扱う上で必要不可欠な技法についても学び、収集する情報を適切に利活用する知識について理解する。また、統計学の基礎を学ぶとともに、生体情報を変数化し、解析を行うための手法の実際について、統計ソフトを用いて学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(10 野村 卓生／4回)</p> <p>呼吸・代謝活動、運動・生活活動・不活動の計測方法を解説、計測を模倣させ、得られた結果を解釈し、情報を適切に利活用する知識について教授する。さらに、ヒトから得られる非侵襲的生理情報の変数化、ならびに分析のための適切な統計方法の基本について解説する。</p> <p>(13 前澤 仁志／4回)</p> <p>非侵襲的生理情報の取得方法および解析方法の概要を解説する。さらに、脳活動、筋活動、口腔機能の計測方法を解説、計測を模倣させ、得られた結果を解釈し、情報を適切に利活用する知識について教授する。</p> <p>(10 野村 卓生、25 福島 卓矢／1回) (共同)</p> <p>保健・医療・福祉分野の研究で使用される統計方法を科学論文から概観し、研究テーマ・デザインに適した統計方法について解説する。また、匿名加工情報等、個人情報を含むデータの取り扱いについても概説する。</p> <p>(13 前澤 仁志、20 田頭 悟志／1回) (共同)</p> <p>循環活動の計測方法を解説、計測を模倣させ、得られた結果を解釈し、情報を適切に利活用する知識について教授する。</p>	オムニバス 一部共同

専門基礎科目	生涯発達学特論	<p>(概要)</p> <p>人の発達、受精から死ぬまでの生涯にわたる時間の経過に伴って個体にある程度継続して起こる変化を指す。本科目では胎児期から高齢期までの時期に起きる個体の変化について運動機能と認知機能の2つに焦点をあて解説する。また、2つの機能は相互に関連しながら発達するため、運動機能と認知機能との関連や生活機能（身辺処理、遊び、仕事等）との関連も含め学ぶ。さらに、運動発達、認知発達の障害とリハビリテーション・教育・心理の臨床場面で使用する発達検査について演習を通し学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(5 加藤 寿宏／4回)</p> <p>人は生涯にわたって発達する存在であるとする生涯発達の概念について解説した後、エリクソン、ハヴィグーストの発達段階理論について解説する。また、リハビリテーションや心理領域で使用する認知発達の評価について講義を行った後、認知発達の障害とその支援について事例を通し議論する。</p> <p>(6 佐藤 春彦／7回)</p> <p>胎児期から新生児期、成人期、そして高齢期に至るライフコースの中での運動機能の発達とその評価、および成長、加齢に伴う運動機能低下とその対策について教授する。</p> <p>(15 松島(杉本) 佳苗／3回)</p> <p>乳児期～学齢期の認知発達・情動発達に関する代表的発達理論や最新の知見について講義を行う。乳幼児期は情動の発達を中心に、乳幼児を対象とした研究手法についても教授する。幼児期・学齢期には、多様な生活機能や環境への適応が求められるようになるため、各生活機能と認知発達を関連づけて学習する。</p> <p>(2 種村 留美 17 宮原 智子／1回) (共同)</p> <p>ヒトの発達過程において、高齢期になると加齢変化によりさまざまな機能が衰えてくる。感覚機能や自律神経機能、運動機能などの身体機能に加えて精神心理機能も同様である。中には精神機能の知的機能のように、流動性知能は低下するが結晶性知能は保たれていることがある。これらの認知機能における加齢変化について教授する。</p>	オムニバス 一部共同
	リサーチ・プレゼンテーション&アカデミック・ライティング	<p>(3 市橋 則明／8回)</p> <p>本授業では、リサーチ・プレゼンテーションおよびアカデミック・ライティングの基本的な理解と応用の方法を学習する。リサーチ・プレゼンテーションでは、聞き手に合わせて、自らの研究成果を理解してもらうことのできる資料作成方法やソフトウェアの利用方法等について学び、学会発表を想定しての実践を行う。また、アカデミック・ライティングでは、筆者が自分の思考について論点を整理して、科学的根拠をもとに学術的文章として表現できるように演習を通して学び、科学雑誌への投稿を想定しての実践を行う。</p>	

<p>専門基礎科目</p>	<p>高度医療技術演習Ⅰ</p>	<p>(概要)</p> <p>本科目では、実際に本学関連医療機関において、指導者のもとで高度医療技術の提供を経験する。高度医療技術とは、最先端の治療器および解析機器を駆使し、最適なリハビリテーションアプローチを的確に実施することを指す。最先端の治療器としては、ロボット下肢装具を用いた治療、MR (Mixed Reality) を用いた治療器、新型物理療法機器等が含まれ、これらによる効果を床反力計測システム、表面筋電図、重心動揺計、身体組成計等を用いて検証する。加えて、機器の使用に限らず、評価結果から病態と原因について仮説をたて、リハビリテーションアプローチを行い、効果検証を行うという臨床推論の手続きを熟練することも本演習のねらいに含まれる。なお、本科目を受講できるのは理学療法士または作業療法士の資格を有するものに限る。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(9 中野 治郎／1回)</p> <p>磁気刺激療法器やショックウェーブ治療器などの最新の物理療法機器を用いた治療法、および片麻痺患者に対する振動療法や電気刺激療法など従来機器を工夫した新たな適応方法について、機器や原理の説明から実技を含めて教授する。</p> <p>(13 前澤 仁志／1回)</p> <p>主な脳電磁場活動の計測手法として、脳波、脳磁場がある。本演習では、体性感覚誘発脳電位・脳磁場活動や運動関連脳電位・脳磁場活動を取り上げ、感覚運動機能に対するリハビリテーション分野への応用法に関して説明する。</p> <p>(15 松島 (杉本) 佳苗／1回)</p> <p>発達性協調運動症 (DCD) など神経発達症児にみられる協調運動の問題を定量的に計測する手法を学ぶと共に、最新の知見を臨床応用につなげるための思考過程を学修する。</p> <p>(13 前澤 仁志、18 蓬萊谷 耕士／1回) (共同)</p> <p>表面筋電図の測定について演習する。表面筋電図に握力計やつまみ力計を同期させ、データの解析および多角的なデータの解釈について演習を行う。</p> <p>(19 橋本 晋吾／1回)</p> <p>近年の映像技術の発展に伴い新しいリハビリテーションの開発が進んでいる。本講義では、現実空間上にコンピュータ・グラフィックスを展開する「Mixed Reality (複合現実)」のアプリケーションを用いて、認知機能や高次脳機能、身体機能に対して評価および介入を行う方法について解説する。</p> <p>(23 砂川 耕作／1回)</p> <p>アイトラッカーを使用した視線分析は対面コミュニケーション、自動車運転、Web評価、神経心理学的評価、マーケティングなど様々な用途で使用されている。本演習では、視線分析と認知機能との関連について解説するとともにリハビリテーションへの応用について議論する。</p> <p>(21 脇田 正徳、22 森 公彦、28 中條 雄太／3回) (共同)</p> <p>歩行再建を目的とした下肢ロボットリハビリテーションについて学び、脳卒中など歩行障害を有する患者に対してアシストパラメータの調整や適応者の判別方法について学習する。また、歩行の問題点や効果判定について、歩行解析機器を用いた定量的分析方法を演習を通して習得する。</p> <p>(25 福島 卓也／1回)</p> <p>本演習では骨格筋量に関する評価手法を整理したうえで、体組成計を用いた骨格筋量の定量化や骨格筋指数の算出を行う。また、舌圧計を用いた口腔ならびに嚥下機能の評価、呼吸筋力計を用いた吸気筋・呼気筋力の定量化などを通して、多面的な機能評価手法を習得する。また臨床や研究場面で応用できるよう、サルコペニア、サルコペニア嚥下障害、呼吸サルコペニアについても整理する。</p> <p>(9 中野 治郎、13 前澤 仁志、15 松島 (杉本) 佳苗、18 蓬萊谷 耕士、19 橋本 晋吾、21 脇田 正徳、22 森 公彦、23 砂川 耕作、25 福島 卓矢、28 中條 雄太／5回)</p> <p>第1回から10回までの講義で学んだ治療器、測定器を用いた治療を、実際の片麻痺患者や整形外科患者、小児患者、がん患者を対象にして実践する。</p>	<p>オムニバス一部共同</p>
---------------	------------------	--	------------------

<p>専門基礎科目</p>	<p>高度医療技術演習Ⅱ</p>	<p>(概要) 本科目では、生涯において健康な生活の遂行ができなくなった高齢者および患者モデルを想定し、最先端の治療器および解析機器を駆使した評価・アプローチをシミュレーションする。治療器としては、生活障害に対するアシスティブテクノロジーを用いた治療や筋機能低下に対するバイオデックスシステム、解析・評価機器としては三次元動作分析装置、表面筋電図、超音波画像装置、生体電気インピーダンス計、脳波計等が含まれる。機器の使用に限らず、仮説生成から評価、効果検証を行うという一連の臨床推論の手続きを熟練することも本科目のねらいに含まれる。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(8 吉村 匡史／1回) 本演習の概要および目的である「高齢者および患者モデルを想定した、最先端の治療器および解析機器を駆使した評価・アプローチのシミュレーション」ならびに「仮説生成から評価、効果検証を行うという一連の臨床推論の手続き」に関して概説し、本演習で用いる機器や各回での演習実施方法を簡単に説明する。</p> <p>(14 福元 喜啓／2回) 超音波画像装置と生体電気インピーダンス法を用いた実践的演習を実施することで、基本的な筋機能・筋特性の評価手法の習得を図る。また、評価機器の特徴や運動機能との関連性を基にした計測パラメータの理解を通して、筋機能・筋特性に関する生理学的な解釈や臨床推論について学ぶ。</p> <p>(27 山縣 桃子／2回) 動作解析装置と床反力計などの機器を用いた実践的演習を実施することで、基本的な動作分析の知識習得を図る。また、運動学・運動力学データを動作間・対象者間で比較することで、各動作特性や運動機能の理解・解釈を深める。</p> <p>(29 梅原 潤／2回) 表面筋電図を用いた実践的演習を実施することで、筋電図の原理の理解と筋活動の計測方法や信号の解析方法の習得を図る。また、多様な身体運動や異なる運動様式における筋電図波形や数値パラメータの比較・考察を通して、神経筋生理学的な筋機能の解釈と臨床推論について学ぶ。</p> <p>(30 中尾 彩佳／2回) 多用途筋機能評価運動装置バイオデックスを用いた筋力トレーニング演習を通して、高齢者および患者の筋機能低下に対する治療器としての活用方法を学ぶ。また、等尺性・等速性筋力などさまざまな種類の筋力評価を実施し、筋力トレーニングの効果を検証する方法を習得する。</p> <p>(8 吉村 匡史、24 山下 円香／4回) (共同) 脳波機器を用いた実践的演習を実施することで、基本的な脳波計測の実験的手法の習得を図る。また、安静時や課題遂行時等の条件付けされたデータ計測、複数条件間における計測データの比較などを通して、脳波を用いた神経生理学的な脳機能の解釈や推論について学ぶ。</p> <p>(4 福井 信佳、16 中山 淳／2回) (共同) 失われた機能の改善を目的とする義肢や装具、生活機能の向上を目的とする福祉機器などのさまざまなAssistive technologyについて紹介する。具体的には治療や生活支援道具の製作方法を学修し、製作した道具の使用効果について検証し討論を行う。また製作過程を通して、さまざまな材料の加工技術を体験することにより自らが製作できるスキルを学修する。</p>	<p>オムニバス 一部共同</p>
---------------	------------------	--	-----------------------

<p>専門科目</p>	<p>生体機能解析学領域</p>	<p>生体機能解析学特論</p>	<p>(概要)</p> <p>本科目では、生涯において健康な生活の遂行を損ねる可能性がある生体機能の変化を理解するために、ヒトの関節運動機能、感覚機能、脳機能についての知識を深め、また先天性を含む疾病、外傷、加齢によって生じる運動障害の病態と、その解析方法を学ぶ。特に骨格筋および関節の機能は移動能力に直結し、健康な生活に不可欠となるため本講義で大きく取り上げ、検査の方法、検査結果の解釈の仕方を学び、運動学的、生理学的、解剖学的な観点から病態解析ができるように高度な知識を身につける。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 飯田 寛和／2回)</p> <p>関節の解剖学的な構造と機能および評価方法について学修する。また、主に変形性股関節症に対する人口関節置換術のケースを取り上げ、関節病態に対する外科的な治療法について学修する。</p> <p>(3 市橋 則明／4回)</p> <p>筋の運動学とバイオメカニクスおよび骨格筋の病態とその解析方法について学修する。また、ストレッチングと筋力トレーニングの知識を深め、エビデンスに基づいて運動療法を適応する能力を養成する。また、筋機能の評価方法についても学修する。</p> <p>(6 佐藤 春彦／3回)</p> <p>歩行の計測の方法と評価変数、および姿勢の安定性評価について学修する。発達、加齢による歩行や姿勢の変化についても学修する。また、日常生活における姿勢・運動計測の方法とその評価方法についても学習する。</p> <p>(9 中野 治郎／3回)</p> <p>基礎実験による研究論文を自分の研究課題および論文に引用・応用できる能力の修得を目的とし、骨格筋と関節の病態に対する組織学的・生化学的解析、痛みの病態の解析方法について学修する。また、物理学的刺激に対する生体反応の知識を深め、様々な病態へ物理療法および運動療法を適応する能力を養成する。</p> <p>(13 前澤 仁志／3回)</p> <p>生体の神経筋制御システムを評価する手法について学習する。具体的には、筋電図(表面筋電図、誘発筋電図)を用いた神経・筋機能評価や脳波や脳磁図計測装置を用いた感覚・運動機能評価法を習得する。また、経頭蓋電気刺激療法を用いた脳への介入手法や口腔機能(嚥下機能を含む)の評価方法についても学習する。</p>	<p>オムニバス</p>
-------------	------------------	------------------	--	--------------

<p>健康支援開発学領域</p> <p>専門科目</p>	<p>健康支援開発学領域</p>	<p>健康支援開発学特論</p>	<p>(概要)</p> <p>本科目では、ヒトの健康を心身機能や生活機能、行動学的・社会的側面から包括的に理解し、健康上の問題を解決するための評価・支援法と、その理論的構築のための能力を開発することを目的に教授する。健康関連課題を包括的に捉え、より健康的に生活していく支援を考えるための科学的基盤となる理論や最新知見について理解を深め、具体的な健康支援策の展開について学際的な視点から探求し、系統的に実践する能力の開発を目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(7 池添 冬芽／3回)</p> <p>高齢者がより健康的に生活していく支援を考えるための基盤となる理論や科学的根拠に基づいた評価・介入法、最新のガイドラインや研究トピックスについて理解を深める。具体的には、地域理学療法に関するガイドラインやエビデンス、筋特性・運動機能の加齢変化、高齢者の運動器の機能低下予防の実際について学修する。</p> <p>(10 野村 卓生／6回)</p> <p>日本人の生活習慣の課題、生活習慣病ならびに腰痛を中心に労働者の健康問題とその対策について解説する。また、呼吸・循環・代謝障害を中心とした内部障害患者の健康問題と関連する国内外の治療・管理ガイドラインについて概説し、内部障害患者の健康支援を目的とした身体活動に関するエビデンスを紹介し、フレイルの実態と身体活動を中心とした対策について解説する。</p> <p>(11 浅井 剛／3回)</p> <p>本講義では、予め計測された歩行動作のデータを分析し、運動学的視点からの解釈を試みる。また、社会へのIoT機器としての実装課題について議論し、新しい健康支援機器の可能性を探索し、開発技術を学ぶ。さらには、英語論文を中心に、現行の健康支援機器に関する情報を集め、自分の研究テーマと比較することで、自分の研究課題の位置付けを明確にすることを目指す。</p> <p>(14 福元 喜啓／3回)</p> <p>運動遂行の基盤となる筋の評価・測定に関する英語論文を収集・抄読し、プレゼンテーション・ディスカッションを行う。具体的には、筋の画像解析機器や筋機能解析機器に関する論文を抄読し批判的吟味を繰り返すことで、それぞれの利点と欠点や課題を理解するとともに適切な手法を探求・開発する能力を身に付け、今後の自身の研究課題を整理・明確化することを目指す。</p>	<p>オムニバス</p>
<p>こどもとおとなの神経科学領域</p> <p>専門科目</p>	<p>こどもとおとなの神経科学領域</p>	<p>こどもとおとなの神経科学特論</p>	<p>(概要)</p> <p>人々が生涯にわたってその人らしく過ごすためには、心身ともに健やかな状態を保つことが望まれる。神経科学とは、脳および全身の神経系の機能や発達に関する研究分野であり、近年その発展には目覚ましいものがある。本科目では脳やこころの機能と発達・その障害に関わる科学的な視点を通してこどもからおとなまで幅広い年齢層にわたる基礎知識と最新の知見、自ら疑問をもち探求するための素養を身につけることを目指し、神経心理学等新しい評価技法や介入研究、認知面の問題を補うAssistive technologyの開発研究や支援技法などを用いた研究方法も含めて教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(2 種村 留美／5回)</p> <p>高次脳機能の基盤である認知や行為、言語、知覚、注意、記憶、遂行機能などの神経メカニズムを教授し、高次脳機能障害を神経科学の観点から評価および介入技法をディスカッションしていく。さらに、高次脳機能障害に対するAssistive technologyを文献検索し、発表(ディスカッションを行う)する。</p> <p>(8 吉村 匡史／5回)</p> <p>脳の機能発現とさまざまな心の動き、意識 (consciousness) の変動・変容との間には密接な関係が存在するが、近年のテクノロジーの進歩にもなつて多くの知見が明らかにされている。本講義では、これらの知見について、健全な状態に加えて何らかの疾患を呈した状態まで、主に神経科学的な観点から概説する。</p> <p>(12 三木 恵美／4回)</p> <p>さまざまな年代 (小児期・AYA世代・成人期・高齢期) のがん患者および地域で暮らす高齢者が抱える神経心理学的問題について、医療保健的視点および制度的見地から概説し、これらに対する評価・アプローチ・支援の在り方について講義、文献レビュー、ディスカッションを行う。</p> <p>(2 種村 留美、8 吉村 匡史、12 三木 恵美／1回) (共同)</p> <p>本特論の目標を達成するには、脳やこころの機能と発達・その障害に関して、基本的な事項から最新の知見まで幅広く知識を身につけておく必要がある。しかし、日々発表されるすべての論文を精読することは困難である。そのため、ここで各学生が文献を互いに発表することによって知識の共有を図る。</p>	<p>オムニバス 一部共同</p>

<p>専門科目</p>	<p>こどもとおとなの生活科学領域</p>	<p>こどもとおとなの生活科学特論</p>	<p>(概要) 病気や障害などで生活に困難がある人の生活支援は、身体機能や認知機能などが日常生活活動（ADL）や生活関連活動（IADL）に影響を与える要因を科学的にとらえ、問題解決能力を高めていく必要がある。また、障害そのものを治すという視点ではなく、障害がありながらも生活を行うという視点から福祉機器、義肢・装具などを活用することも重要となる。さらに、家族を含む包括的支援に加え、地域社会全体で育てる・支えるという視点から、教育機関、行政機関、地域社会と協働していく必要がある。本特論では、疾患、障害に伴うさまざまな生活障害に関し、科学的な視点を通してこどもからおとなまで幅広い年齢層にわたる基礎知識と最新の知見、自ら疑問をもち探求するための素養を身につけることを目指し、疾患・障害と生活障害との関連を教授する。また、家族・地域支援、福祉機器、義肢・装具などを用いた支援技法などを研究方法も含め教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(4 福井 信佳／4回) 障害のある人々に対するリハビリテーションの実践について講義する。特に四肢の切断者に対する評価方法、治療方法について講義し、失われた手足の機能を補う義肢について学修する。さらに義肢に対する機能と構造を理解し、切断者が行う日常生活活動への利用について学修する。また四肢の切断者に対するリハビリテーションに関連する福祉機器についても解説する。</p> <p>(5 加藤 寿宏／4回) 発達過程における障害は、感覚、運動、認知機能などの遅滞や障害が発達期に生じ、生涯にわたり個人の発達に影響を与える。そのため、乳児期、幼児期、学齢期といったさまざまなライフステージで障害をもちながら生活することが重要となる。発達過程の障害と生活について概説した後、神経発達症の不器用とそれぞれのライフステージにおける生活障害を考える。また、学校生活が主な生活の場となる学齢期の神経発達症児の支援について討議する。</p> <p>(15 松島(杉本) 佳苗／4回) アタッチメントや子育て環境など、主に乳幼児期の親子関係について解説をし、神経発達症にみられる対人コミュニケーションの障害を中心に、基礎的知識と最新の知見に関して教授する。また、神経発達症で高頻度みられる感覚処理障害に関して、基礎的知識と最新の知見について学習する。さらに、長期入院をしている子どもの生活支援にも焦点をあて、院内学級における教育関係者とリハビリテーション専門職との協業のあり方についても考える。</p> <p>(16 中山 淳／3回) 装具療法の概要や問題点・課題の抽出するとともに、各疾患に対してエビデンスに基づいた装具療法の選択方法、作成方法と臨床研究に発展させる過程について解説する。</p>	<p>オムニバス</p>
-------------	-----------------------	-----------------------	---	--------------

<p>専門科目</p>	<p>生体機能解析学領域</p>	<p>生体機能解析学演習</p>	<p>(概要) 本科目では、生体機能解析学特論で紹介された非侵襲的検査方法による測定結果の解釈と統計学的処理について先行研究の読解を含めた演習方式で学修する。超音波エコー、三次元動作解析、重心動揺計、脳波、慣性計測装置 (IMU)、表面筋電図、口腔機能検査、身体組成計、モデル動物を用いた基礎実験それぞれの評価・測定方法の利点と欠点、統計学的処理方法ならびに解釈の仕方を理解した上で、自らが研究テーマに相応しい測定法を選択し、生体の運動機能・生理機能を解析する力の修得を目指す。さらに生体解析学に関わる先行研究の批判的吟味を繰り返し、主体的に活用する能力を習得するとともに、自身の研究課題の位置づけを明確化することを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 飯田 寛和／2回) 変形股関節症の病態、動作解析、人工関節置換術に関する論文を取り上げ、その内容について学生がプレゼンテーションを行った後、教員が説明を加え、さらに論文の問題や課題、自分の研究課題に応用できる内容について学生を含めて討論する。</p> <p>(3 市橋 則明／4回) 筋の運動学とバイオメカニクス、ストレッチング、筋力トレーニングに関する論文を取り上げ、その内容について学生がプレゼンテーションを行った後、教員が説明を加え、さらに論文の問題や課題、自分の研究課題に応用できる内容について学生を含めて討論する。</p> <p>(6 佐藤 春彦／3回) 歩行解析関連論文 (関節運動、筋活動、関節モーメント、筋パワーの分析)、姿勢制御関連論文 (重心動揺の時間、距離、周波数、非線形分析)、非拘束長時間運動計測、小児運動機能関連論文を取り上げ、その内容について学生がプレゼンテーションを行った後、教員が説明を加え、さらに論文の問題や課題、自分の研究課題に応用できる内容について学生を含めて討論する。</p> <p>(9 中野 治郎／3回) がん患者の運動機能と身体組成、廃用性筋萎縮モデル動物の組織学的解析および生化学的解析、急性痛・慢性痛モデル動物の行動学的解析を用いた論文を取り上げ、その内容について学生がプレゼンテーションを行った後、教員が説明を加え、さらに論文の問題や課題、自分の研究課題に応用できる内容について学生を含めて討論する。</p> <p>(13 前澤 仁志／3回) 神経筋電磁場活動や口腔機能に関する論文を取り上げ、その内容について学生がプレゼンテーションを行った後、教員が説明を加え、さらに論文の問題や課題、自分の研究課題に応用できる内容について学生を含めて討論する。</p>	<p>オムニバス</p>
-------------	------------------	------------------	--	--------------

<p>健康支援開発学領域</p> <p>専門科目</p>		<p>健康支援開発学演習</p>	<p>(概要)</p> <p>本科目では、身体構造・機能から心理・社会的、行動学的領域まで、ヒトの健康に関わる評価・測定方法について演習形式で学習する。客観性・信頼性・簡便性・経済性等の面から、それぞれの評価・測定方法の利点と欠点を理解し、自らが研究対象とする領域、対象の属性に応じた評価・測定法を選択し、健康に関わる課題を科学的・体系的に解明し、支援法を探索・開発する力を身につけることを目指す。さらに健康支援に関わる先行研究の批判的吟味を繰り返し、主体的に活用する能力を習得するとともに、自身の研究課題の位置づけを明確化することを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(7 池添 冬芽／3回)</p> <p>高齢者の運動機能・生活機能向上に関する英語論文を収集・抄読し、学術的背景や現状の課題・問題点、課題解決のための手法、自身の研究課題への応用等についてプレゼンテーション・ディスカッションを行う。また、ディスカッションを通して、今後の自身の研究課題を整理・明確化するとともに、新たな健康支援法を創出することにつなげる。</p> <p>(10 野村 卓生／6回)</p> <p>働く世代の健康問題とその対策ならびに内部障害患者の運動機能・生活機能向上に関する英語論文を収集・抄読し、学術的背景や現状の課題・問題点、課題解決のための手法、自身の研究課題への応用等についてプレゼンテーション・ディスカッションを行う。また、ディスカッションを通して、今後の自身の研究課題を整理・明確化するとともに、新たな健康支援法を創出することにつなげる。</p> <p>(11 浅井 剛／3回)</p> <p>本講義では、予め計測された歩行動作のデータを分析し、運動学的視点からの解釈を試みる。また、社会へのIoT機器としての実装課題について議論し、新しい健康支援機器の可能性を探索し、開発技術を学ぶ。さらには、英語論文を中心に、現行の健康支援機器に関する情報を集め、自分の研究テーマと比較することで、自分の研究課題の位置づけを明確にすることを旨とする。</p> <p>(14 福元 喜啓／3回)</p> <p>運動遂行の基盤となる筋の評価・測定に関する英語論文を収集・抄読し、プレゼンテーション・ディスカッションを行う。具体的には、筋の画像解析機器や筋機能解析機器に関する論文を抄読し批判的吟味を繰り返すことで、それぞれの利点と欠点や課題を理解するとともに適切な手法を探索・開発する能力を身につけ、今後の自身の研究課題を整理・明確化することを旨とする。</p>	<p>オムニバス</p>
<p>こどもとおとなの神経科学領域</p> <p>専門科目</p>		<p>こどもとおとなの神経科学演習</p>	<p>(概要)</p> <p>人々は生涯にわたって、年代を問わずさまざまな疾患を有することが避けられない。本演習では、数多い疾患の中でも脳やこころの機能と発達に関する疾患を取り扱う。高次脳機能障害、認知症、こどもからおとなまで各年代における精神疾患や悪性疾患にともなう精神面の変調などについて、科学的な視点から疾患論を教授したのち、文献研究を通してリハビリテーションやAssistive technologyなどの支援方法を自ら見出す演習を行う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(2 種村 留美／5回)</p> <p>高次脳機能障害である失語、失行、失認、注意障害、記憶障害、遂行機能障害、社会行動障害の評価技法、認知リハビリテーションについて、最新のトピックを文献検索し、アクティブラーニングで発表し、自分の症例と照合を行う。</p> <p>(8 吉村 匡史／4回)</p> <p>精神疾患は医療計画における5疾病の一つに含まれており、生涯を通じての健康維持において大きな問題となりうる。本講義において、各精神疾患の病態に関して主に神経科学的な観点から概説するとともに精神疾患の病態の客観的評価の方法を紹介することで、効果的なアクティブラーニングの土台とする。</p> <p>(12 三木 恵美／6回)</p> <p>さまざまな年代（小児期・AYA世代・成人期・高齢期）のがん患者および地域で暮らす高齢者が抱える神経心理学的問題に対するリハビリテーションアプローチや支援方法について、文献レビューに基づいて検討・立案・発表し、グループディスカッションによりフィードバックを得る。さらにその支援方法の有効性や実施可能性を検証するための研究方法を立案する。</p>	<p>オムニバス</p>

<p>専門科目</p>	<p>こどもとおとなの生活科学領域</p>	<p>こどもとおとなの生活科学演習</p>	<p>(概要) 人々は生涯に渡り、さまざまな疾患や障害から生活障害を有する。本演習では、脳の障害、運動器障害、発達過程の障害に起因した機能障害や生活障害に対し、現在使用されている評価・測定方法について演習形式で学習する。各評価・測定方法を客観性・信頼性・簡便性等の面から、それぞれの評価・測定方法の利点と欠点を理解し、自らが研究対象とする領域、対象に応じた評価・測定方法を選択できることを目標とする。さらに、機能障害や生活障害に対し行われている国内外の評価・測定方法、治療・支援方法に関する先行研究に対し批判的吟味を行い、新たな評価・支援方法を創造する能力を育成する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(4 福井 信佳／4回) 身体機能障害領域におけるリハビリテーションの実践課程について講義する。その上で、ここでは非障がい者が体験できる模擬能動義手、模擬筋電義手を装着し義手の評価とアプローチについて学修する。また日常生活上のさまざまな活動を模擬義手を用いて体験する。さらにケーススタディを通して上肢切断者が有する臨床課題や社会における生活課題について討論する。</p> <p>(5 加藤 寿宏／4回) 知的発達症、自閉スペクトラム症を主とした神経発達症児の生活支援をする上で不可欠な、適応行動、協調運動の評価法について演習を通して習得する。また、適応行動、協調運動に障害がある児の事例を通して、その支援法を考える。</p> <p>(15 松島 (杉本) 佳苗／4回) 社会性の障害、感覚処理障害に関する評価について標準化されている検査を中心に演習を行い、臨床的解釈や臨床推論を行う思考過程について教授する。さらに、神経発達症児・者のケーススタディを通し、臨床的仮説に基づき治療もしくは研究を実施するための計画立案について学ぶ。</p> <p>(16 中山 淳／3回) 各疾患における装療法に関する観察研究の研究手段と研究デザインおよび研究計画の作成法について教授する。</p>	<p>オムニバス</p>
-------------	-----------------------	-----------------------	--	--------------

研究 科 目	特別研究	<p>(1 飯田 寛和) 整形外科分野における主要疾患の病態、診断治療などについて指導する。</p> <p>(2 種村 留美) 頭部外傷、脳血管障害及び認知症から生じる高次脳機能障害に対する評価技法開発、介入研究、在宅支援研究などについて指導する。</p> <p>(3 市橋 則明) 運動器理学療法に関する臨床的研究およびバイオメカニクス的研究・超音波画像解析による筋の形態学的研究・ストレッチングと筋力トレーニングに関する研究を中心に研究指導する。</p> <p>(4 福井信佳) 義肢装具、福祉用具など日常生活活動を支援する機器の開発および効果の検証について研究指導する。</p> <p>(5 加藤 寿宏) 神経発達症、小児がんなどの小児を対象としたリハビリテーションの臨床研究（評価方法の開発、効果研究、学校作業療法など）に関して研究指導する。</p> <p>(6 佐藤 春彦) 小児から高齢者まで、人の姿勢・動作の力学的分析に関する研究を志望する学生の指導を行う。</p> <p>(7 池添 冬芽) 加齢による身体機能（運動機能、骨格筋特性など）の変化に関する解析、高齢者に対する運動機能評価法および効果的な運動トレーニング法の開発などについて研究指導を行う。</p> <p>(8 吉村 匡史) 神経生理学的指標の一つである脳波を用いてヒトの心理状態、認知機能等を評価する研究を指導する。</p> <p>(9 中野 治郎) がんに伴う運動障害と身体症状の予防・治療法に関する臨床研究および基礎研究について指導をする。</p> <p>(10 野村 卓生) 糖尿病を中心とした生活習慣病患者への身体機能・24時間行動評価に基づいた運動療法・24時間行動支援、腰痛予防などの勤労者の健康管理に関して研究指導を行う。</p> <p>(11 浅井 剛) 生体センサを用いた歩行動作分析や高齢者の転倒発生メカニズムに関して、臨床疫学的な手法に基づいて研究指導する</p> <p>(12 三木 恵美) がん患者・サバイバーおよび地域在住高齢者に対するリハビリテーションの評価・治療に関する研究指導を行う。</p> <p>(13 前澤 仁志) 非侵襲的脳機能計測法（脳波、脳磁図等）や脳刺激法（経頭蓋電気刺激法等）などを用いてヒトの感覚運動機能の中枢制御機構解明や感覚運動機能障害に対する新規ニューロリハビリテーション技術確立に関する研究指導を行う。</p> <p>(14 福元 喜啓) 高齢者や各種疾患における骨格筋機能障害の解析法や治療法に関する臨床研究について指導する。</p> <p>(15 松島(杉本) 佳苗 / 3回) 神経発達症児を主な対象とした感覚や協調運動に関する評価指標の開発ならびに家族支援に関して研究指導する。</p> <p>(16 中山 淳) バイオメカニクス・病態運動学の観点から、運動機能障害に関する臨床研究や義肢装具を用いた日常生活支援および介入方法に関して研究指導する。</p>
--------------	------	--

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校を取定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 4 「主要授業科目」の欄は、授業科目が主要授業科目に該当する場合、欄に「○」を記入すること。なお、高等専門学校の学科を設置する場合は、「主要授業科目」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 高等専門学校の学科を設置する場合は、高等専門学校設置基準第17条第4項の規定により計算することのできる授業科目については、備考欄に「☆」を記入すること。

学校法人関西医科大学 設置認可等に係る組織の移行表

令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和7年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
関西医科大学				関西医科大学				
医学部				医学部				
医学科	127	—	752	医学科	127	—	757	
看護学部				看護学部				
看護学科	100	—	400	看護学科	100	—	400	
リハビリテーション学部				リハビリテーション学部				
理学療法学科	60	—	240	理学療法学科	60	—	240	
作業療法学科	40	—	160	作業療法学科	40	—	160	
<hr/>				<hr/>				
計	327	—	1,552	計	327	—	1,557	
関西医科大学大学院				関西医科大学大学院				
医学研究科				医学研究科				
医科学専攻 (M)	8	—	16	医科学専攻 (M)	8	—	16	
医学専攻 (D)	50	—	200	医学専攻 (D)	50	—	200	
看護学研究科				看護学研究科				
看護学専攻 (M)	20	—	40	看護学専攻 (M)	20	—	40	
看護学専攻 (D)	5	—	15	看護学専攻 (D)	5	—	15	
				<u>生涯健康科学研究科</u>				
				<u>生涯健康科学専攻 (M)</u>				研究科の専攻 の設置 (認可申請)
<hr/>				<hr/>				
計	83	—	271	計	91	—	287	